女子大学生の学業に関わるコミュニケーション能力と自己効力の関係についての実態調査

金城　光*

要　約

自己効力とは課題や行動に対する自己の遂行能力の予測、効力の信念を意味し，その信念の強度が後の行動に影響を与える重要な心的要素である。筆者は若者のコミュニケーション能力育成には当該能力に対する自己効力の向上を視野に入れた教育が必要であろうと考えるが，コミュニケーション能力と自己効力に関する詳しい研究はほとんどない。そこで，女子大学生の学業に関わるコミュニケーション能力の自己効力に関係する要因について質問紙調査を行った。具体的には，学業で特に必要と考えられる4つの基本的なコミュニケーション能力として，「話す」，「聞く」，「書く」，「プレゼンテーション・自己主張」をとりあげた。自己効力に関わる要因としては，当該能力に対する「経験」，「意欲」，「評価」，「感情」，「態度」を考えた。相関分析の結果，異なるコミュニケーション能力にもかかわらず，各々のコミュニケーションにおいて自己効力が低いと感じている学生（当該の能力が乏しいと認識している学生）にはほぼ共通の特徴があり，その能力についての過去の経験が乏しい，その行為の実現に対する不安感情が強い，他者からの評価が低いと認識している傾向が見られた。今後学業に関わるコミュニケーションに問題を抱えている学生の学習支援に役立てるためには，データ数や質問項目の設定など課題となった点を改善し，本研究の知見の因果関係を調査していく必要がある。

1　はじめに

近年，若者のコミュニケーション能力の育成が問題になっているが，若者のコミュニケーション能力育成には当該能力に対する自己効力の向上を視野に入れた教育が必要であろうと考える。しかし，コミュニケーション能力についての自己効力に関する詳細な研究はほとんどない。そこで，女子大学生の学業に関わるコミュニケーション能力と自己効力の関係について質問紙調査を行った。学業で必要と考えられる基本的なコミュニケーション能力について学生がどのような問題を抱えているのか自己効力を中心に明らかにし，今後の学習支援に役立てることができるのかその可能性を探る。

本稿では，第2節で社会活動や大学で必要とされる若者のコミュニケーション能力について簡単に述べた後，第3節で自己効力について説明し，本稿に関連する自己効力の先行研究を紹介する。第4節で調査内容，第5節で結果・考察，第6節

*大妻女子大学　社会情報学部

で結論を述べる。

2 社会や大学で重視されるコミュニケーション能力

社会活動における若年者のコミュニケーション能力の重要性の認識は従来にないほど高まっている。この傾向は，平成17年に厚生労働省が行った若年者の雇用の実態を把握するため企業実態調査[1]に顕著に現れている。この調査は，日本全国を対象に13大産業〔鉱業，建設業，製造業，電気・ガス・熱供給・水道業，情報通信業，運輸業，卸売・小売業，金融・保険業，不動産業，飲食店，宿泊業，医療，福祉，教育，学習支援業，サービス業（他に分類されないもの）〕に属する常用労働者30人以上を雇用する民営企業のうちから一定の方法で無作為に抽出した企業を対象に行われた。その中で，若年正社員に望むことや身につけて欲しい能力（3つまでの複数回答）についてみると，「職業意識・勤労意欲」(49.0%)，「チャレンジ精神・向上心」(40.4%)，「マナー・社会常識・一般教養」(39.4%)，「強い責任感」(37.6%) に続いて，「コミュニケーション能力」(27%) が挙げられている。身に付けて欲しい能力を業種別に見ると，「コミュニケーション能力」を重視する割合は，情報通信業 (55%)，不動産業 (35.4%)，サービス業 (33.3%) で非常に高い。また，企業規模別にみると，規模が大きくなるほど「コミュニケーション能力」を挙げる企業割合が順に高くなり，5000人以上の大企業では採用で最も重視する項目 (60.7%) となっている。このように，組織に属して社会活動を行う上でコミュニケーション能力が重要視されていることがわかる。

このように就職基礎能力としてコミュニケーション能力が強調される背景には，コミュニケーション能力の乏しい若者の増加が影響していると考えられる。若者のコミュニケーション能力不足は，近年社会問題となっている若年無業者（いわゆるニート）や，若年不安定就労（いわいるフリーター）の増加とも無関係ではないだろう。若年無業者や若年不安定労働者は大学進学者の間でも年々増加している[2]。このような現状をふまえ，若者が職業能力開発について目標を持ち，意欲を持って取り組むことを目的として，平成16年度には厚生労働省が「YES－プログラム（Youth Employability Support Program（若年者就職基礎能力支援事業））」を立ち上げた。これは，企業が若年者に対して求めている就職基礎能力（コミュニケーション能力や職業人意識など）を身に付けるための講座や試験を主催し，受講者に認定講座終了証や認定試験合格証書を発行する事業である[3]。若年層のコミュニケーション能力の育成は喫緊の問題である。本学においても2006年度夏季休業中に同プログラムが多摩キャンパスで3日間開催され，延べ約50名の学生が参加した。

大学生活においてもコミュニケーション能力は重要である。ただし，学生のコミュニケーション能力と一口に言っても，学業，交友関係を含めた人間関係の形成・維持，部活動やサークルなどの課外活動，アルバイトやボランティアなどの社会活動など，生活場面によって重要視される能力は異なる。そこで，本稿では，学業面に特に必要と考えられるコミュニケーション能力に限定して議論を進める。

高校までの授業と大学での講義は授業形態が大きく変化する。高校までは，英語，数学，などある程度確立された知識をテキストを中心として学習することが多い。しかし，大学では講義者によって講義内容，教授方法，テキストの有無，など多くの面で高校以上に多様である。また，大学での成績は期末テストのように理解度を試験で測る形式の他，個人やグループでの共同作業によるレポート，課題作成，プレゼンテーションなど，高校までとは異なる形式で評価を受けることも多い。したがって，大学生が学業で満足できる評価を受けるためには，高校までの教育以上にコミュニケーション能力が必要とされると考えられる。

大学生の学業に関わるコミュニケーション能力についての研究は，英語教育，最近では日本語教員養成のための日本語教育など語学教育の観点からの研究が多く，大学での講義全般に関係する基

本的なコミュニケーション能力について論じたものはあまりない。ただし，最近では実践的なコミュニケーション能力を育成するために大学教育で何ができるか論じた研究もでてきている（たとえば，北本，2000；矢野，2006など）。大学の講義や実習では様々なコミュニケーション能力が必要であると考えられるが，本研究では特に重要なコミュニケーション行為として，自分の主張をわかりやすく言葉で伝える「話す」能力，講義を含めた相手の主張や真意を正確に理解する「聞く」能力，自分の主張を文書でわかりやすく表現する「書く」能力，自分の主張を複数の人を前に説得していく「プレゼンテーション・自己主張」能力の４つを考えた。学業で必要と考えられるこれら４つのコミュニケーション能力について学生がどのような問題を抱えているのか自己効力を中心に質問紙による実態調査を試みた。

3　自己効力

本節では，本調査の鍵概念となる自己効力について，および，本稿に関連する自己効力の先行研究を簡単に説明する。

「自己効力（self-efficacy）」とは，様々な定義があるが本質的には「ある課題や行動に対する自己の遂行能力の予測，効力の信念」を意味する。「自己効力感」と訳されることもある。自己効力は，Albert Bandura（1977）によって最初に提唱された社会的認知理論の中核となる概念で，人間の行動を制御する認知的な自己規制のメカニズムとして作用すると考えられている。これまでの研究から，効力の信念は行為の選択，課題に対する努力の程度・維持，逆境からの回復力，ストレス・抑うつ・疾病などに対する抵抗力に影響があることが報告されている（バンデューラ，1997）。たとえば，「話す」というコミュニケーション行為を例に挙げてみる。「話す」行為がこれまでの一般的な自己効力の知見にあてはまるとすると，「話す」についての自己効力が強ければ（例，自分は人前で話すことが得意だ，自信がある），積極的に話す行為を選択し，人前で話すという課題に対して継続的な努力をし，たとえある程度精神的な負荷を伴っても失敗を恐れずその行為を遂行し，失敗しても立ち直る可能性が高いことが予測できる。ある行為について自己効力が弱い場合は，上述の例とは逆の悪循環のサイクルに陥る可能性が予測できる。ただし，効力の信念は多元的であり，信念の強さは領域によって異なる。たとえば，英語に関する自己効力は，数学に関する自己効力とは異なる。同様に，「話す」に関する自己効力は，「聞く」に関する自己効力とは異なる可能性がある。したがって，各コミュニケーション行為について各々測定すべきである。

自己効力は元々数多くの臨床的な知見をベースに確立された概念であるが，筆者は教育の現場で学習者の自己効力を高める教育は非常に重要な仕事であると考える。教育機関は，専門的な特定の知識や技術の習得の場を与えるとともに，学習者の自己学習の好循環サイクルを導くきっかけの場を様々な場面で提供できることが望ましい。自己効力はその際の鍵概念となると予想する。学業におけるコミュニケーションについての自己効力と自己効力に影響する要因の関係を解明することによって，学業におけるコミュニケーションに問題がある学生の特徴が明らかになる。その特徴を分析することによって，自己効力が関与する好循環学習サイクルを導くにはどのようにすればよいかの手がかりが得られるのではないかと考えた。

教育と自己効力に関する研究は，高等学校までの教育や学生を対象にした研究が多い。たとえば，教育的課題の達成について強い効力感を感じている学生は，難しい問題に出会った時に，感じていない学生よりも，努力し，継続的にその課題に取り組むことが報告されている（バンデューラ，1997）。大学生の自己効力に関する研究もいくつか報告されている。例えば，Lent, Brown, & Larkin（1984）は，自己効力が大学での専攻の選択，学業の達成，専門領域での研究に対する持続力に対してポジティブな関連を示したと報告している。Lent らは，科学職，技術職それぞれ15種類の職業に就職するための自己効力について

調査した。1年の追跡調査の間，自己効力の強い学生は，弱い学生よりもより強い持続性をみせ，どちらのコースにおいても成績が良かった。また，効力感は，数学の能力と学内での成功の予測と正の相関関係を示した。日本で大学生の学業に関する自己効力の研究はあまり多くないが，たとえば，大学生の卒業後の進路選択行動が自己効力に影響を受けることを調査した研究がいくつかある（浦上，1996；富永，2000；冨安，1997など）。これらの研究では，総じて，自分で進路を選択していけるという自己効力の強い学生は，弱い学生よりも進路選択行動が活発であると報告されている。

自己効力と大学生のコミュニケーション行為について論じた研究は，筆者の知る所わが国ではわずか1件のみである。園田・森正（1999）は，大学生のコミュニケーション能力を規定する要因を調査するため，コミュニケーション・スキルの自己効力感を中心に質問調査を行った。ただし，これは予備調査ということで，分析された内容は著者の所属する大学と他大学の学生の間のコミュニケーション能力や自己効力感に関する回答の平均の有意差の報告が中心で，命題となっていたコミュニケーション能力を規定する要因は報告されなかった。

Bandura（1977）によれば，自己効力が導かれる要因には，「遂行行動の達成度（performance accomplishments）」，「代理的経験（vicarious learning）」，「言語的説得（verbal persuasion）」，「情動的喚起（emotional arousal）」の4つが挙げられている。「遂行行動の達成度」の要因は，ある行動の遂行において成功を体験することで自己効力予期が高まるというもので，自己効力に最も大きな影響を及ぼす要因と考えられている。「代理的経験」は，遂行行動の達成度の要因ほどは影響力がないが，他者の行動の成功する過程の観察を通して自己効力が高められるという要因である。「言説的説得」は，第三者からの説得によって自己効力が高められるという要因である。「情動的喚起」は，肉体的に感じる不安やストレスに対する脆弱性の程度によって，自己効力が予測できるという要因である。

今回の調査では，これら自己効力に影響する要因をふまえて，コミュニケーションにおける自己効力を中心に学業に関わるコミュニケーション能力についてアンケート作成を行った。

4 調査方法

(1) 予備調査

まずアンケートを実施する前に，2006年度前期にコミュニケーション論を受講している学生を対象に「話す」，「聞く」，「書く」，「プレゼンテーション」それぞれの能力について日頃感じている問題について自由形式のレポートで報告してもらった。

結果，「話す」ことについて学生が認識している問題では，「敬語が使えない」，「自分の思っていることを正確に伝えられない」，「適当な言葉がすぐに見つからない」，「緊張する」，「初対面の人と上手く話せない」，「相手の気持ちがわからない」，「人の目を見て話せない」，などが挙げられていた。「聞く」ことについて学生が認識している問題には，「つまらない話を聞けない」，「話を誤解する」，「相手の話をさえぎる」，「一方的に話す」「目を見て話を聞けない」，が挙げられていた。「書く」ことについては，「文章，漢字が書けな」，「自分の思っていることを正確に伝えられない」，「講義ノートを作れない（話を聞きながら書けない）」，「感情を上手く伝えられない」，などが挙げられていた。「プレゼンテーション」においては，「緊張する」，「人前で上手く話せない」，「頭が混乱する」，「聴衆を見て話ができない」，などが挙げられた。これらのレポートの結果をふまえてアンケートでは，話す，聞く，書く，プレゼンテーションの各コミュニケーション行動について質問項目を考えた。

(2) 調査対象者

2006年度前期コミュニケーション論の授業に出席した学生，および，著者のゼミに所属している学生，合計59名にアンケートを依頼した。回収率

は100%である。

(3) 調査内容

質問項目では，コミュニケーション能力の自己効力を尋ねる質問のほか，以下の5要因を考慮した。「遂行行動の達成度」に関連する「経験（これまでにどれくらい能力を試す機会があったか)」，「代理的経験」に関連する「意欲（他者の行動の成功する過程の観察を通して特定のコミュニケーション遂行しようとする意志，意欲)」，「言語的説得」に関連する他者からの「評価（第三者によって能力がどのように評価されたか)」，「情動的喚起」に関連する「感情（行為に伴う不安，緊張などの感情)」のほか，「態度（特定のコミュニケーション能力に対する信念)」の5つの要因である。

これらの5要因と4種類のコミュニケーション行動を組み合わせて，話す(13)，聞く(28)，書く(12)，プレゼンテーション・自己主張(21)について計74項目の質問紙を作成した（括弧内は各コミュニケーション行動の質問項目数）[4]。予備調査のレポートの結果からプレゼンテーションは自己主張と密接な関係にあると判断されたので，プレゼンテーション・自己主張をひとつのカテゴリーとして質問項目を考えた。

「聞く」行動の質問項目は，他のコミュニケーション行動の質問項目よりも多い。これは，2つの理由による。第一に，「聞く」行動の中に話を理解する能力を含めた理解力の項目を入れた（Q2，3，8，16，20，33，35，36，49，50，57，58，73）ためである。第二に，聞き上手の尺度として考案された「オープナー・スケール」（小口，1989）から，7項目を選んで追加したためである。この尺度は，話し手に注目し，相手から信頼を受け，相手の情報や感情を汲み取る能力を測定するもので，2つの因子が関与していると考えられている。相手の気持ちをなごませる「なごませ」因子と相手の気持ちに共感できる「共感」因子である。本調査には，共感因子に関わる5つの項目，なごませ因子に関わる2つの項目を入れた。「オープナー・スケール」の項目を「聞く」項目に入れた理由は，人の話しを聞く基本的な姿勢が測定できるのではないかと考えたからである。

頻度を尋ねる項目では，「よくある」，「ときどきある」，「どちらともいえない」，「あまりない」，「まったくない」の5件法，意見や態度を尋ねる項目では，「まったくその通りだと思う」，「そうだと思う」，「どちらともいえない」，「そうは思わない」，「まったくそうは思わない」の5件法で答えてもらった。

5　結果・考察

調査項目間の相関分析を中心に，コミュニケーションの自己効力が低い学生の特徴を分析した。Table 1に，コミュニケーション行動に対する各質問項目内容の平均値，標準偏差を示す。

(1) 「話す」について

Table 2に「話す」に関する質問項目間の相関分析結果を示す。表からわかるように，因果関係は当然わからないが，人にわかりやすく話すことが苦手と感じている（Q22）学生は，人前で話す経験に乏しく（Q21），美しい日本語を話すこととに対する自己効力（Q1，13）や，要点をまとめることに対する自己効力（Q39，44）が低い。また，他者からの評価も低い（Q23，25）と感じていて，不安感情が強い傾向（Q29）があることがわかる。話すことに対しての自己効力と，話しをするのが上手い人を真似しようと思う（Q11）意欲の項目とは相関関係はなかった。

(2) 「聞く」について

Table 3に「聞く」に関する質問項目間の相関分析結果を示す。この表から，人の話を聞くのが苦手（Q34）と感じている学生は，話の要点の理解が苦手（Q2，3）で，要点を整理しながら聞く習慣が無く（Q16），話を理解しようという態度（Q20）や，話を遮らないで聞こうという態度（Q27）に欠けている。また，集中力に乏しく（Q7），つまらない話や興味のない話は聞きたくな

Table1. コミュニケーション行動に対する質問項目内容の平均値と標準偏差

(N=59)

行動	分類	項目内容	平均	標準偏差
話す	自己効力	Q01 きれいな日本語を話すのが苦手だ。	2.49	0.88
	自己効力	Q13 丁寧語や謙譲語などを話すのが得意だ。	3.19	0.92
	自己効力	Q22 人にわかりやすく話すのが得意だ。	3.46	1.07
	自己効力	Q29 小説や映画のあらすじを面白く伝えるのは苦手だ。	2.71	1.03
	自己効力	Q44 難しい話をやさしく伝えるのは苦手だ。	2.78	0.91
	経験	Q21 人前で話すのは慣れている。	3.12	1.19
	意欲	Q11 話をするのが上手い人みると真似しようと思う。	1.93	0.85
	評価	Q23 話上手だと言われる。	3.49	1.17
	評価	Q25 人は私の話がわかりやすいと言う。	3.46	0.99
	感情	Q61 人に話しがわかりやすかったと言われると嬉しい。	1.41	0.59
	感情	Q39 自分は他の人より、話が下手なのではないかと心配になることがある。	2.61	1.31
	態度	Q04 きっちりした日本語を話さない人を軽蔑する。	3.16	0.87
	態度	Q46 できれば人にわかりやすく話しをしたいと思う。	1.28	0.45
聞く	自己効力	Q02 人の話の要点を短くまとめるのは苦手である。	2.69	1.18
	自己効力	Q03 人の話で大事な所はすぐわかる。	2.53	0.73
	自己効力	Q34 人の話を聞くのは苦手である。	3.88	0.83
	自己効力	Q35 人の話を聞いていて、内容がわかななくなることがある。	2.72	1.06
	自己効力	Q50 人の話を理解するのは得意だ。	2.83	0.70
	自己効力	Q57 授業のノートをとるのが得意だ。	2.98	0.96
	経験	Q16 わかりにくい話や込み入った内容の話は整理して考えることに慣れている。	2.03	0.70
	経験	Q24 人からその人自身についての話をよく聞かされる。	2.27	0.87
	意欲	Q08 人の話のポイントがよくわかっている人を見ると真似しようと思う。	1.98	0.92
	意欲	Q33 人の話をもっと理解しやすくなる方法があれば知りたいと思う。	1.92	0.99
	評価	Q72 聞き上手だといわれる。	2.74	1.16
	感情	Q09 人の悩みを聞くと同情してしまう。	2.39	0.98
	感情	Q69 興味のない話は聞きたくない。	3.17	0.95
	感情	Q70 私といると相手はくつろいだ気分になれる。	2.88	0.79
	感情	Q73 話がわかりにくいとイライラする。	2.31	1.01
	感情	Q49 自分は他の人より、人の話の内容が理解できていないのではないかと心配になることがある。	2.69	1.15
	感情	Q74 他人と比較して、人の話を聞く能力が劣っているのではないと心配になることがある。	2.85	1.17
	態度	Q07 人の話を聞くときは集中して聞く。	2.14	0.88
	態度	Q20 できるだけ人の話を理解しようと心がけている。	1.81	0.73
	態度	Q26 授業を聞くのが苦痛だ。	3.14	1.07
	態度	Q27 人の話を途中でさえぎることはしない。	2.85	0.93
	態度	Q36 授業中ノートをとるのは面倒くさい。	3.41	1.13
	態度	Q37 人の話を聞くのが好きだ。	2.19	0.96
	態度	Q41 話手の気持ちになって話を聞く。	2.15	0.81
	態度	Q62 つまらない話のときは、最後まで聞きたくない。	2.54	0.93
	態度	Q68 私は他人の言うことを素直に受け入れる。	2.49	0.92
	感情	Q28 私は一人でいるより誰かと一緒にいたいと思うことが多い。	2.64	1.14
	態度	Q58 色々な人の考え方や意見が理解できると嬉しい。	1.54	0.65
書く	自己効力	Q06 読書感想文を書くのは苦手だ。	2.30	1.22
	自己効力	Q42 レポートを書くのは得意だ。	3.64	1.16
	自己効力	Q53 手紙を書くのは得意だ。	2.56	1.16
	自己効力	Q67 言葉で自分の意見をうまく表現できない。	2.53	1.13
	経験	Q54 文章を書くのは慣れている。	3.51	1.19
	意欲	Q38 上手な文章を読むと真似しようと思う。	2.05	0.90
	評価	Q18 人から文章が上手いと言われる。	3.24	1.13
	感情	Q31 文章を書くのは好きではない。	3.03	1.16
	感情	Q32 人の文章を添削するのは好きだ。	3.44	1.02
	感情	Q59 自分の書いた文章を読むのは恥ずかしい。	2.47	1.29
	感情	Q55 自分は文章を書くのが下手なのではないかと心配になることがある。	2.60	1.22
	態度	Q47 できるだけわかりやすい文章を書こうと心がけている。	1.71	0.67
自己主張	自己効力	Q05 人前で自分の意見を主張するのは苦手である。	3.04	1.35
	自己効力	Q30 人と違う意見を言うのは苦手である。	3.27	1.10
	経験	Q63 人前で自分の意見を言うのは慣れている。	3.17	1.12
	意欲	Q60 自分の意見を上手に述べている人を見ると真似しようと思う。	1.80	0.74
	評価	Q43 人から意見を述べるのが上手いと言われる。	3.32	1.18
	感情	Q10 自分の意見を話しているとつい話しに熱が入ってしまう。	2.08	0.93
	感情	Q19 他人が自分の意見を否定すると頭にくる。	3.14	0.90
	態度	Q15 自分の意見を通すのはよくないと思う。	3.08	0.92
	感情	Q40 人前で自分の意見を言うとき緊張する。	2.17	1.18
	感情	Q65 意見を述べるとき、自分の意見は間違っているのではないかと心配になることがある。	2.47	1.02
	態度	Q64 人と議論するのは好きだ。	2.85	1.19
プレゼンテーション	自己効力	Q51 人前でプレゼンテーションするのは得意だ。	3.51	1.10
	経験	Q48 これまでに（学校などで）人前で自分の意見を発表する機会が多かった。	2.71	1.11
	経験	Q56 これまでに（学校などで）人前で自分の作品、演奏、運動など発表する機会が多かった。	2.69	1.07
	意欲	Q45 上手にプレゼンテーションしている人を見ると真似しようと思う。	1.72	0.64
	評価	Q14 人からプレゼンが上手いと言われる。	3.50	1.11
	感情	Q12 大勢の人の前に立つと緊張してしまう。	1.93	1.19
	感情	Q17 プレゼンなどでどれだけ準備しても、もっと練習や準備をしておけばよかったと後悔することが多い。	2.47	1.04
	意欲	Q52 上手にプレゼンテーションしている人を見ると自分にはとてもできないと思う。	2.78	1.19
	態度	Q66 何かを発表する際は念入りに準備する。	2.31	0.99
	態度	Q71 できれば上手なプレゼンテーションをしたいと思う。	1.49	0.73

Table2.「話す」項目間の相関係数

	Q1	Q4	Q11	Q13	Q21	Q22	Q23	Q25	Q29	Q39	Q44	Q46	Q61
Q1 きれいな日本語を話すのが苦手だ。	—												
Q4 きっちりした日本語を話さない人を軽蔑する。	−.097	—											
Q11 話をするのが上手い人みると真似しようと思う。	.046	−.060	—										
Q13 丁寧語や謙譲語などを話すのが得意だ。	−.457**	.135	−.006	—									
Q21 人前で話すのは慣れている。	−.321*	.010	.145	.090	—								
Q22 人にわかりやすく話すのが得意だ。	−.390**	−.195	.148	.315*	.524**	—							
Q23 話上手だと言われる。	−.409**	.006	.174	.412**	.479**	.645**	—						
Q25 人は私の話がわかりやすいと言う。	−.482**	.054	.120	.455**	.583**	.727**	.745**	—					
Q29 小説や映画のあらすじを面白く伝えるのは苦手だ。	.253	.067	−.160	−.215	−.252	−.345**	−.453**	−.459**	—				
Q39 自分は他の人より、話が下手なのではないかと心配になることがある。	.438**	−.158	.007	−.310*	−.312*	−.471**	−.470**	−.498**	.297*	—			
Q44 難しい話をやさしく伝えるのは苦手だ。	.418**	−.041	−.154	−.300*	−.357*	−.531**	−.416**	−.652**	.316*	.417**	—		
Q46 できれば人にわかりやすく話しをしたいと思う。	.044	.034	.268*	−.169	.117	−.076	−.076	−.041	.225	.237	.013	—	
Q61 人に話がわかりやすかったと言われると嬉しい。	.007	.009	.262*	.017	.077	.055	.105	.060	.026	.163	.137	.418*	—

注）＊＊p<.01, ＊p<.05

い（Q62, 68）。他方，人の話を理解できていないと不安を感じ（Q49, 74），他者からの評価も低いと感じている。直接授業に関わる質問項目をみると，人の話を聞くのが苦手な学生は，授業を聞くのが苦痛（Q26），ノートをとるのが面倒くさい（Q36），ノートをとるのが不得意（Q57），と感じている。しかし，人の話を理解するのが不得意（Q50）と感じとっている学生が全く意欲に欠けているかといえばそうではなく，人の話しを理解しやすくする方法があれば知りたい（Q33）と現状を改善したいという気持ちが伺える。

(3)　「書く」について

Table 4 に「書く」の質問項目間の相関分析結果を示す。レポートを書くのは不得意（Q42）と感じている学生は，レポートだけでなく読書感想文を書くことも不得意（Q 6 ）で，文章表現に対する自己効力が全般的に低い（Q67）。また，他者からの評価が低いと認識しており（Q18），文章表現に対する不安感情が強く（Q55, 59），文章を書くことを好まない（Q31），文章を書いた経験に乏しい（Q54）という傾向がみられた。文書表現に対しての自己効力と，上手な文章を読むと真似しようと思う（Q38）の項目とは相関関係

Table3. 「聞く」項目間の相関分析

質問項目	Q02	Q03	Q07	Q08	Q09	Q16	Q20	Q24	Q26	Q27	Q28	Q33	Q34
Q02 人の話の要点を短くまとめるのは苦手である。	—												
Q03 人の話で大事な所はすぐわかる。	−.534**	—											
Q07 人の話を聞くときは集中して聞く。	−.026	.102	—										
Q08 人の話のポイントがよくわかっている人を見ると真似しようと思う。	−.228	.194	.472	—									
Q09 人の悩みを聞くと同情してしまう。†	−.089	.046	.297**	.179	—								
Q16 わかりにくい話や込み入った内容の話は整理して考えることに慣れている。	−.177	.135	.249*	.382**	.007	—							
Q20 できるだけ人の話を理解しようと心がけている。	.033	.090	.228	.432**	.247	.287*	—						
Q24 人からその人自身についての話をよく聞かされる。†	−.238	.289*	−.004	.136	−.167	.158	.217	—					
Q26 授業を聞くのが苦痛だ。	.033	−.115	−.166	−.050	−.035	−.262*	−.143	−.096	—				
Q27 人の話を途中でさえぎることはしない。†	.099	−.084	.089	−.246	−.028	.118	.059	.052	−.187	—			
Q28 私は一人でいるより誰かと一緒にいたいと思うことが多い。	.008	.042	−.123	−.137	.018	−.207	−.164	.012	.237	−.020	—		
Q33 人の話をもっと理解しやすくなる方法があれば知りたいと思う。	.200	−.201	−.145	.093	−.107	−.022	.145	.007	−.038	−.109	−.073	—	
Q34 人の話を聞くのは苦手である。	.261*	−.265*	−.331*	−.093	−.090	−.381**	−.292*	−.193	.365**	−.293*	−.082	.260*	—
Q35 人の話を聞いていて、内容がわかからなくなることがある。	.180	−.033	−.096	.026	.001	−.078	−.064	−.030	.310*	−.258	.267*	−.034	.160
Q36 授業中ノートをとるのは面倒くさい。	.172	−.180	−.281*	−.143	−.207	−.172	−.199	−.044	.649**	−.302*	.194	−.030	.363**
Q37 人の話を聞くのが好きだ。†	−.069	−.013	.450**	.367**	.248	.186	.497**	.081	−.320*	.288*	−.030	.018	−.491**
Q41 話手の気持ちになって話を聞く。	−.186	.243	.360**	.330*	.207	.178	.459**	.137	−.184	.078	−.127	.017	−.358**
Q49 自分は他の人より、人の話の内容が理解できていないのではないかと心配になることがある。	.389**	−.238	.008	.060	.138	−.076	.178	.154	.118	−.207	.231	.296*	.160
Q50 人の話を理解するのは得意だ。	−.444**	.421**	.244	.054	−.005	−.025	−.037	.136	−.175	.044	.008	−.422**	−.333**
Q57 授業のノートをとるのが得意だ。	−.363**	.311*	.315*	.119	.081	.289*	−.004	.089	−.384**	.139	−.053	−.203	−.306*
Q58 色々な人の考え方や意見が理解できると嬉しい。	−.207	.007	.050	.160	.149	.226	.180	−.021	.041	.082	.171	−.008	−.070
Q62 つまらない話のときは、最後まで聞きたくない。	.059	−.147	−.196	−.009	−.046	−.055	−.203	.113	.355**	−.242	−.010	.125	.306*
Q68 私は他人の言うことを素直に受け入れる。†	−.018	.097	.429**	.297*	.281*	.332*	.242	.046	−.191	.232	−.044	.028	−.306*
Q69 興味のない話は聞きたくない。	.062	−.131	−.193	−.155	.057	−.430**	−.128	−.057	.400**	−.225	.120	.163	.309*
Q70 私といると相手はくつろいだ気分になれる。†	−.058	.080	.321*	.092	.194	.105	.110	.299*	−.265*	.211	.086	−.079	−.205
Q72 聞き上手だといわれる。†	−.110	.160	.368**	.289*	.081	.357**	.310*	.227	−.381**	.129	−.212	−.123	−.512**
Q73 話がわかりにくいとイライラする。	−.163	−.047	−.205	.038	−.072	−.092	−.212	.139	.312*	−.190	.135	.010	.272*
Q74 他人と比較して、人の話を聞く能力が劣っているのではないと心配になることがある。	.415**	−.228	−.164	.094	−.157	−.168	.127	−.009	.304*	−.308*	.178	.361**	.335**

注1）† オープナー・スケールからの質問項目（小口，1989）
注2）**p<.01，*p<.05

Q35	Q36	Q37	Q41	Q49	Q50	Q57	Q58	Q62	Q68	Q69	Q70	Q72	Q73	Q74
—														
.279*	—													
−.115	−.282*	—												
−.173	−.277*	.409**	—											
.359**	.270*	.094	−.005	—										
−.249	−.205	.253*	.198	−.376**	—									
−.141	−.521**	.268*	−.042	−.371**	.408**	—								
−.081	−.024	.035	−.029	.133	−.018	−.013	—							
.227	.375**	−.294*	−.203	.060	−.410**	−.222	−.123	—						
−.179	−.229	.410**	.270*	−.019	.103	.207	.037	−.196	—					
.129	.272*	−.198	−.215	.001	−.293*	−.208	−.179	.419**	−.216	—				
−.270	−.312*	.419**	.327*	−.003	.220	.298*	.027	−.215	.368**	−.042	—			
−.200	−.235	.606**	.332*	−.068	.257	.299*	−.178	−.204	.302*	−.328*	.401**	—		
.339**	.327*	−.324*	−.198	.150	−.217	−.156	.294*	.375*	−.376**	.342**	−.034	−.365**	—	
.386**	.399**	−.150	−.176	.503**	−.355**	−.511**	.133	.234	−.202	.117	−.225	−.265*	.238	—

はなかった。

(4) 「プレゼンテーション・自己主張」について

Table 5に「プレゼンテーション・自己主張」の質問項目間の相関分析結果を示す。プレゼンテーションが不得意（Q51）と感じている学生は，自己主張に関する自己効力が低く（Q5，30），人前で自分の意見を述べる際の不安感情が高く（Q12，40），人前で自分の意見を述べたり，作品・演奏・運動などを発表したりといった過去の経験に乏しい（Q48，56，63），他者からの評価も低いと認識している（Q14，43）ことがわかる。また，どれだけ準備をしてももっと練習や準備をしておけばよかった後悔する傾向がある（Q17）。

自己主張についてもプレゼンテーションとほぼ同じ結果となった。また，人前での自己主張が苦手（Q5）と感じている学生は，自分の意見を通すのはよくない（Q15），人と違う意見を言うのが苦手（Q30），人との議論を好まない（Q64）傾向があることもわかった。

プレゼンテーションや自己主張の自己効力の低さと，プレゼンの上手な人を真似しよう（Q45），意見を上手に述べている人を真似しよう（Q60）という意欲とは相関関係はなく，上手にプレゼンテーションしている人を見ると自分にはとてもできないと思う（Q52）とあきらめている傾向が伺える。

6 結論

今回の調査では，「話す」，「聞く」，「書く」，「プレゼンテーション・自己主張」の学業に関わる4つの基本的なコミュニケーション能力について自己効力を中心にアンケート調査を行い，各々のコミュニケーション能力について相関分析を行った。結果，各々のコミュニケーション能力の自己効力が低いと感じている学生（当該の能力が乏しいと認識している学生）には，ほぼ共通の特徴があることがわかった。すなわち，各コミュニケーション能力に対して自己効力の低い学生は，その能力についての過去の経験が乏しい，その行為の実現に対する不安感情が強い，他者からの評価が低いと認識している傾向があることが明らかになった。つまり，「話す」，「聞く」，「書く」，「プレゼンテーション・自己主張」というコミュニケーション行為の差異にかかわらず，全てのコミュニケーション能力の自己効力において，Bandura（1977）が呈示した4つの自己効力関連要因の中，3つの要因に関わる質問項目と強い相関が見られたことになる。

また，各コミュニケーション能力と自己効力についての特有の傾向がいくつか見られた。たとえば，「話す」に関する自己効力の低い学生は，美しい日本語を話すことに対する自己効力や，要点をまとめることに対する自己効力が低い傾向が見られた。「聞く」に関する自己効力の低い学生は，話の要点の理解が苦手で，集中力が乏しい傾向が見られた。また，これらの学生は，授業が理解できない，ノートがとれないという傾向がある。

今回は当該目的のために行った最初の調査であり，いくつかの課題が残った。

まず，今回は調査対象者が少なく，アンケートの項目全体の因子分析などができなかった。今回得られた結果は，あくまで複数の項目や要因の相関関係であり，因果関係ではない。例えば，人前で話す経験が少ないから，緊張し，結果，思ったように人前で意見が言えない，第三者からの評価が低いのか，緊張傾向が強いため，人前で話すことが少なくなっているのか，などの因果関係はわからない。また，今回の4つのコミュニケーション能力間の自己効力との関係についても解明する必要がある。今後は，データを増やして共分散構造方程式などを用いた因果関係の分析が必要である。因果関係がわかれば，学生のコミュニケーション能力を高めるために，どのような学習支援をしていけばよいのかの手がかりがつかめるかもしれない。

次に，各コミュニケーション能力における質問項目の一貫性の問題がある。今回の調査では，身近な手本を真似てみようという意欲では，「聞

Table4.　「書く」項目間の相関係数

	Q06	Q18	Q31	Q32	Q38	Q42	Q47	Q53	Q54	Q55	Q59	Q67
Q06 読書感想文を書くのは苦手だ。	—											
Q18 人から文章が上手いと言われる。	−.574**	—										
Q31 文章を書くのは好きではない。	.556**	−.538**	—									
Q32 人の文章を添削するのは好きだ。	−.172	.192	−.202	—								
Q38 上手な文章を読むと真似しようと思う。	−.155	.193	−.051	−.044	—							
Q42 レポートを書くのは得意だ。	−.565**	.564**	−.403**	.193	.167	—						
Q47 できるだけわかりやすい文章を書こうと心がけている。	−.178	.090	−.209	−.088	.196	.221	—					
Q53 手紙を書くのは得意だ。	−.204	.266*	−.347**	.123	−.077	.240	.276*	—				
Q54 文章を書くのは慣れている。	−.088	.090	−.187	−.003	.120	.333*	.186	.164	—			
Q55 自分は文章を書くのが下手なのではないかと心配になることがある。	.294*	−.382**	.424**	−.136	.213	−.346**	−.438**	−.518**	−.152	—		
Q59 自分の書いた文章を読むのは恥ずかしい。	.534**	−.482**	.404**	−.253	−.066	−.370**	−.038	−.271*	−.137	.447	—	
Q67 言葉で自分の意見をうまく表現できない。	.340*	−.496**	.287*	−.068	−.089	−.351**	−.243	−.393**	−.256	.572**	.614**	—

注）**p<.01，*p<.05

く」に関しては人の話を理解しやすくする方法があれば知りたいという方略獲得に対する意欲が見られた。また，プレゼンテーション・自己主張では，上手にプレゼンテーションしている人を見ると自分にはとてもできないというあきらめ傾向がみられた。ただし，方略獲得に対する意欲について尋ねたのは「聞く」のみ，効力にたいする意欲の欠如に関しては「プレゼンテーション・自己主張」でのみの質問で，４つのコミュニケーション間で結果の比較ができない。各コミュニケーションで同様の質問を設定するべきだった。

また，事前の予備調査では人の目を見て話せないなどの非言語コミュニケーションに問題を感じている学生が散見されたが，今回のアンケートには非言語コミュニケーションに関する質問がなかった。今後のアンケートに盛り込んでいく必要がある。

今後はこれらの課題をふまえた調査が必要である。

注

1）厚生労働省「平成17年企業における若年者雇用実態調査結果の概況」2006
http : //www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/keitai/05/index.html

2）文部科学省「学校基本調査」
http : // www. mext. go. jp/ b_menu/ toukei/ 001/ index01. htm

3）Youth Employability Support Program

Table5. 「プレゼンテーション十自己主張」の項目間の相関係数

	Q05	Q10	Q12	Q14	Q15	Q17	Q19	Q30	Q40	Q43	Q45	Q48	Q51
Q05 人前で自分の意見を主張するのは苦手である。	—												
Q10 自分の意見を話しているとつい話しに熱が入ってしまう。	−.303*	—											
Q12 大勢の人の前に立つと緊張してしまう。	.465**	−.010	—										
Q14 人からプレゼンが上手いと言われる。	−.459**	.305*	−.474	—									
Q15 自分の意見を通すのはよくないと思う。	.270*	−.049	.228	−.470**	—								
Q17 どれだけ準備しても、もっと練習や準備をしておけばよかったと後悔することが多い。	.351**	−.007	.529**	−.528**	.410**	—							
Q19 他人が自分の意見を否定すると頭にくる。	.098	.109	.025	.079	.153	.133	—						
Q30 人と違う意見を言うのは苦手である。	.580**	−.141	.253	−.365**	.372**	.415**	.154	—					
Q40 人前で自分の意見を言うとき緊張する。	.562**	−.092	.749**	−.448**	.243	.384**	.190	.325**	—				
Q43 人から意見を述べるのが上手いと言われる。	−.650**	.381**	−.230	.514**	−.361**	−.295*	−.042	−.495**	−.301*	—			
Q45 上手にプレゼンテーションしている人を見ると真似しようと思う。	−.107	.149	.020	.158	.056	−.137	−.032	−.212	.209	.133	—		
Q48 これまでに（学校などで）人前で自分の意見を発表する機会が多かった。	−.384*	.090	−.497**	.552**	−.314*	−.430**	−.184	−.429**	−.501**	.386**	−.041	—	
Q51 人前でプレゼンテーションするのは得意だ。	−.428**	.125	−.631**	.655**	−.282*	−.484**	−.053	−.287*	−.545**	.454**	.000	.527**	—
Q52 上手にプレゼンテーションしている人を見ると自分にはとてもできないと思う。	.518**	−.107	.477**	−.663**	.429**	.490**	.093	.364**	.458**	−.464**	−.144	−.503**	−.635**
Q56 これまでに（学校などで）人前で自分の作品、演奏、運動など発表する機会が多かった。	−.388**	.337**	−.274*	.508**	−.343**	−.239	.079	−.310*	−.218	.461**	.045	.604**	.469**
Q60 自分の意見を上手に述べている人を見ると真似しようと思う。	−.102	.201	.043	.139	−.076	−.052	.042	−.144	.179	.096	.759**	−.135	−.083
Q63 人前で自分の意見を言うのは慣れている。	−.688**	.184	−.629**	.559**	−.234	−.531**	.028	−.489**	−.534**	.599**	.179	.566**	.684**
Q64 人と議論するのは好きだ。	−.468**	.152	−.350**	.263*	−.131	−.276*	.036	−.578**	−.302*	.479**	.350*	.409**	.284*
Q66 何かを発表する際は念入りに準備する。	.110	−.206	.092	−.115	−.078	.136	−.082	.043	.063	.027	−.028	−.111	.117
Q71 できれば上手なプレゼンテーションをしたいと思う。	−.144	.166	−.061	.183	−.322*	.028	−.077	−.300*	−.079	.274*	.149	.029	.027

注）**p<.01, *p<.05

Q52	Q56	Q60	Q63	Q64	Q66	Q71
—						
−.432**	—					
−.130	−.036	—				
−.646**	.534**	.105	—			
−.293	.180	.279	.593**	—		
−.143	−.117	.082	−.070	−.178	—	
−.052	−.003	.382**	.044	.308**	.048	—

（YESプログラム：若年者就職基礎能力支援事業）
http : // www. bc. javada. or. jp/ yes/

4）今回報告した74項目の質問以外に，「メタコミュニケーション能力（コミュニケーションに関して意識的に心がけていること）」，最近の就職試験で活用されることの多い「グループディスカッションで苦手と感じていること」についても質問したが，今回は割愛する。

参考文献

Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavior change. Psychological Review 84, 191-215.

Bandura, A. 1995 Self-efficacy in changing societies. Cambridge University Press.（本明寛・野口京子　監訳　激動社会の中の自己効力　1997　金子書房）

小口孝司　1989自己開示の受けてに関する研究——オープナー・スケール，RJ-JA-DQとSMIを用いて　立教大学社会学部研究紀要応用社会学研究，34，82－91.

北本晃治　2000　コミュニケーション教育と教育パラダイム　——「書くこと」を軸とした有機的コミュニケーション教育——　日本コミュニケーション学会，13，1－16.

Lent, R. W., Brown, S. D., & Larkin, K. C. (1984). Relation of self-efficacy expectations to academic achievement and persistence. Journal of Counseling Psychology, 31, 356-362.

園田雅代・森正義彦　1999大学生におけるコミュニケーション能力を規定する諸要因：コミュニケーションスキル自己効力感を手がかりとした予備的研究　創価大学教育学部論集 47，59－92.

富永美佐子　2000女子大学生の進路選択過程における自己効力　進路指導研究，20，21－31.

冨安浩樹　1997　大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連　発達心理学研究，8，15－25.

浦上昌則　1996　女子短大生の職業選択過程についての研究—進路選択に対する自己効力，就職活動，自己概念の関連から—　教育心理学研究，44，195－203.

矢野善郎2006「価値文節型ディベート」による社会科学教育　——「三つどもえディベート」にみるディベート教育の更なる可能性——

A Questionnaire Study on the Relationship between Communication Capabilities Relating to Academic Situations and Self-Efficacy among Female Undergraduate Students.

KINJO HIKARI
School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

Abstract

The present study was designed to investigate relationships between communication capabilities in academic situations and self-efficacy among female undergraduate students. The targeted communication capabilities were "speaking", "listening comprehension", "writing", and "presenting and asserting". The author hypothesized that in order to make progress in communication capabilities it is important to consider improvement in the self-efficacy related to the capabilities. However, fewer studies have clarified their relationships. The present results indicated that low self-efficacy in any of the four communication activities significantly correlated with a lack in experience, anxiety about performing the activity, and perceived low level of appraisal for the activity. To clarify the cause and effect of the results of the correlation analyses, it is necessary to improve the questionnaire and collect more data.

Key Words（キーワード）

Self-Efficacy（自己効力），Communication（コミュニケーション），Female Undergraduate Students（女子大学生），Communication Capabilities（コミュニケーション能力），Academic Capabilities（学力）